

3.11 後を生きる

飼い犬が見つめていた

木島章

鳶色とびいろの潤んだ瞳にうつる
フクシマの大地

人はそこに不毛を見るけれど。
野に放たれた家畜たちは
死の灰を巻き上げ悠然と駆けめぐる。

十年、それとも百年
原野は人を拒み続け。

テレビカメラを遠巻きに
画面から消えた犬たち

服従の遺伝子を放射線に断ち切られ
忘れたはずのオオカミの血を覚醒させるのか。

千年、いな万年
止められない細胞分裂。

動物たちは
放射能といっしょに

どんな進化をたどり
どんな世界を生きていくだろう
そのとき人間の居場所はあるのか。

牛や豚や馬を従えた犬たちは
廃炉になった建屋の頂上で
いっせいに雄叫びおたけびをあげる。

そんな夢にうなされて目を覚ますと
飼い犬が見つめていた

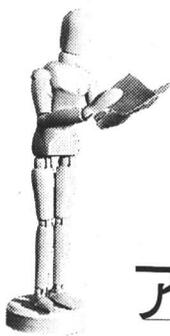
遠い未来から聞こえる仲間の声に
じっと耳を澄ましていたのか。
その潤んだ瞳にうつった私は
途方に暮れているだけだった。

(「脱原発・自然エネルギー218人詩集」より)



きじま あきら
1962年、神奈川県生まれ。詩誌「エガリテ」、詩人会議所属。

民意は脱原発を支持しているのに、日本という国は国民の願いや子どもたちの未来より原発利権や核潜在保有国という幻想の方が大切らしい。事故の原因や責任が糾明されないまま、今も原発は動いている。これだけ民意がバカにされているのだから、私たちは声をあげ続けなければならぬ。そんな思いでこれからも詩を書いていきたい。これまで結果的に原発を容認してしまつた贖罪しよんざいの思いも込めて。



ア シ タ ノ コ ト バ

